

運動遊具と社会性の発達



神 沢 良 輔

〈1〉 遊びと遊具

幼稚園における幼児の活動の大部分は、いうまでもなく遊びである。そして、その遊びは、同年令層の幼児を中心とする集団のなかでなされる。幼児は、これらの集団の中で人間関係を通して、いろいろな社会的経験をしていく。この社会的経験の質と量とが、幼児の社会的行動や、社会性の発達に大きな影響を与えている。そして、遊びを通して、これらの社会的経験の量を増し、その質を高めていくことは、幼稚園教育の一つの大きな目標であることについてはいうまでもない。

そのためには、遊びをよりよく発展させて、その中で社会的交渉を通じて、望ましい社会的経験をできるだけ多くさせる必要がある。だから、教師としては、遊びを発展しやすいように環境を用意

してやらなければならない。それは、幼児の行動が、環境によって規制されているからである。

そのようなわけで、幼児は自分たちの遊びを発展させるための環境として、第一に場所と施設を要求するだろう。だから、場所があまりにも限定されており、施設や遊びの材料が少ないようなところでは、社会的反応の質は低下する（註）といわなければならない。

といっても、そのために——場所については簡単に解決できない問題もあるので除くとしても——どのような遊具でも、数多くさえあればよいということはいえないであろう。それは、それぞれの遊具が、子どもの遊びの発達・興味・身体的な能力・安全性などに対しての十分な妥当性をもっているかについて不明の点が多いし、また、遊びの媒介としての遊具それ自体の特性や限界も

あると思われるからである。

過去において、遊具についての研究は、それ故に、いろいろな角度からなされてきた。そして、室内遊具の一部のものについては、一応の解決のなされたものもある。(註2)しかし、もっとも緊急を要することは、遊びの活動と遊びの設備についての、なお一層の研究をすることである。……遊びの設備の教育的効果を測定する手段の発達ということが、そのために要求される”ということをも、マックローリンはいつている。(註3)

このことは、遊びと遊具の研究が、いかに必要であるかということとを物語っている。

〈2〉 納屋幼稚園の研究

まえがきのようなことが長くなつたが、前述のような意味での遊具の研究の例として、四日市市の納屋幼稚園の研究(註4)を中心に紹介しながら、運動遊具と社会性の発達についての問題点を拾つてみることにする。

この研究は、過去五年間にわたつてなされてきたものであり、今後とも恐らく続けられると思われるので、ここにのべるのは、いわばその中間的な報告といったものである。筆者も、この研究には、で

きる限り参加した。

さて、この研究で対象となつた運動遊具の種類は、固定遊具と、それを結合(綜合)したものと、および移動遊具の三種類である。そして、それぞれの遊具が、幼児の社会性の発達にどのような影響を与えるかについて、自由遊びの場面を中心として研究してきたわけである。

では、それぞれの運動遊具についての種類別に——このような分類の方法については問題もあるだろうが——考えてみることにしよう。なお、対象の園児は五才児のみである。

〈3〉 固定遊具と社会性の発達

まず、固定遊具についてであるが、ここでいう固定遊具は、園庭や運動場にある、形を変えることが不可能であり、移動のできない遊具をさしている。すなわち、ジャングル・ジム・ぶらんこ・低鉄棒などである。

この研究では、自由遊びの場面を利用して子どもたちの遊びを、遊具間の移動、遊びの状態とルール、会話について観察し、それぞれの遊具についての許容人員、誘意性、最高・最低人員と空白時間との関係、移動数、遊びの種類・種類・遊び方・ルール

について、の五つの面から考えてみた。

さて、上述の許容人員とは、それぞれの遊具が、どの程度の人員を受け入れるかということであり、許容人員の少ない遊具は、集団的な遊具を構成することができないし、また、社会的交渉のなされにくい遊具ということがいえよう。誘意性とは、それぞれの遊具が、幼児をどれだけ引きつける力があるかということである。だから、誘意性もあり、許容人員も多い遊具は、集団的な遊具を構成するという面からみると、よい遊具ということになる。しかし、これらの遊具での遊具の持続時間があまり少ないようでは、遊具の発展について問題があるので、それぞれの遊具についての最高人員（五分単位で観察）、最低人員、誰もいなかった空白時間との関係や、個人がどのくらい遊具の間を移動したか（観察時間二十分）についてみることに——これを移動数として表示——も意味がある。これらは、いずれも統計的に示すことができるが、統計的に示しにくい、遊具の種類・種類・遊び方・ルールは、社会性の質に関する大きな問題である。

このような観点から、子どもたちの遊びをみてみると、

- 1 大部分の固定遊具は、十名前後の人員を集めているので、その中で、社会的行動のおきる可能性はある。二人乗りぶらんこなどでも、待っているものを入れると、十名前後の幼児が参加している。

- 2 けれども、実際には、いろいろな固定遊具のどれでもに、期待している社会的行動がみられるとは限らない。

- 3 そして、幼児にとって誘意性の高い遊具のなかにも、低次の社会的行動よりみられないものがある。例えば、低鉄棒やコンビネーション大鼓橋などがそれである。

- 4 各遊具についての遊具の持続時間を移動数で示すと、二十分間に平均五回程程度で、幼児ほど移動数は少ない。——被験者は幼・小一・三・五年——また、移動のときは、集団的に移動するということがほとんどなく、大部分が個人的であり、したがって移動数の個人差は、幼児ほど多い。

- 5 遊具の種類では、パターンの分類に従うと、「平行遊び」を中心として、「独り遊び」「連合遊び」に集中している。そして、学年が向上しても、この傾向はあまり変らない。

- 6 幼児の発達を中心とした各学期ごとの観察についても、傾向は同様である。

というような問題があることがわかった。

そこで、これまでの資料をもとにして、固定遊具と社会性の発達との関係を、以下のように結論づけること——研究を進めるための仮定といった方がよいかもしれない——が、できるかもしれない。

- 1 固定遊具は、身体的な諸活動には役立つが、社会性の発達

には、積極性をもっていない。

2 固定遊具の構造の固定化は、遊びの創造に対して消極的である。

これは三学期によくみられることであるが、運動場全体にわたって遊びが発展しだすと、固定遊具は一つの「もの」として使用される。——例えばジャングルジムは、砦になったり、家になったりして、幼児はおとなや教師が期待し想像しているような、遊具本来の目的である遊びをしなくて、単なる物体として利用しているにすぎない。——また、固定遊具のみを使用しての遊びは、ほとんどみられない。

3 そして、固定遊具の構造上の特性により、創造的に遊びの発展のなかで適応させて、再構成することが不可能になっている。

このことは、小学校の児童においても、固定遊具での期待される社会的行動があまりみられずに、平行遊びが中心となっていることや、幼稚園でも三学期になると、移動のきく、机・平均台・マットなどをもちだして、固定遊具であまり遊ばないこともわかる。

4 これらのことは、さらに典型的な発達に対する不規則性——発達するに従って、固定遊具についての社会的行動も多くなると考えていたが——をもたらせることにもなるようである。

なお、固定遊具のなかにも、グローブ・ジャングルのように、一部に動くところのあるものもあるが、その特性は、一般の固定遊具

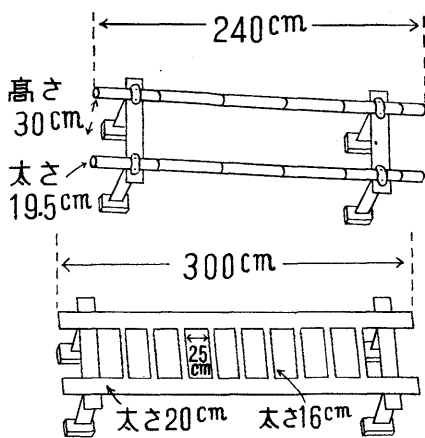
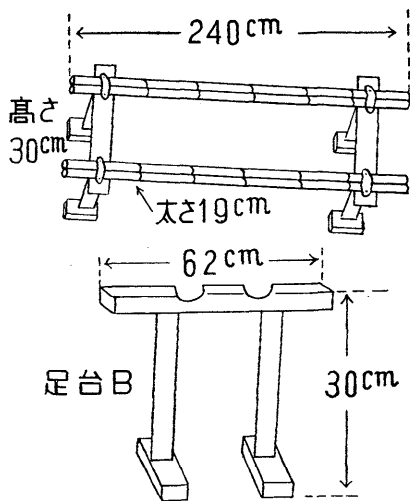
と同じである。(註5)

〈4〉 固定遊具の総合(結合)と社会性の発達

さて、このような固定遊具の問題点を解決するために、消極面ではあるが、固定遊具の間に通路をつける——結合するといってもよいだろう——ことにした。それは、通路によって、固定遊具の固定性を幾分でも減少させ幼児の行動範囲も広げ、さらに社会的行動をも発展できるのではないかと考えたからである。これは、総合遊具といわれているものと、本質的な考え方は同じであろう。

そこで、ダブル・キャスルジムとコンビネーション大鼓橋の間をS字型に掘った溝——深さは平均一米、長さ十米程度——で結び、その上へさらに平均台などを置いて、結びつきを強くするようになった。

しかし、このようにして、固定遊具の連結や、総合化を試みても、本質的には、固定遊具についての問題点と、大きな差異を認めることができなかつた。



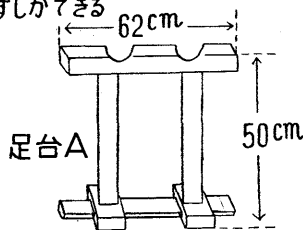
足台はとりはずしができる

構成

竹一本
竹二本
梯子
足台

平均台
平均台
A
B

1
1
2
2



〈5〉 移動遊具と社会性の発達

このようなわけで、この研究は、新しい観点から出発しな
おさなければならなかった。それは、固定遊具以外の運動遊具を
みつけたことである。しかし、それはなかなか困難であるので、
これまでの研究をもとにして、遊具を試作してみることにした。

その作製基準の主なものは、

一 遊びの創造性に対して積極性をもたせるために、その媒介となる遊具は、移動できる遊具であること。

二 幼児の遊びの発展によく適応するため、形態——組み合わせ方による形態の変化——の変化が自由にできること。

三 大きさ、重量については、幼児に協同性をもたせるため、二人程度の協力で操作できるものであること。

四 固定遊具の間を、遊びの発展に応じて自由に連絡できるものであること。

などで、このような基準で作製した遊具の見取図を示すところ
のようにある。

さて、この遊具についての一年間にわたる観察でわかったことを示そう。これについては、詳細にのべたいが、紙面の

都合上、その結論よりのべることができないのが残念である。

一 まず、遊びの種類については、その数においても固定遊具に比して増加している。これは、遊具の配置が自由に変えられるためで、一つの遊びでも、遊びの変化にともなうて組み合わせ方も変えられ、その型は、子どもたちの創造にまかせられている。

すなわち、一学期のはじめは、遊具の組み合わせはなられず、遊具の各ピースを固定遊具のように取り扱い、固定遊具でよく遊んでいるような、鬼あそびや、身体的活動を中心としたものが多い。一学期の中頃になると、それ以外に、他の固定遊具と関連させたような構成あそびがみられるようになる。二・三学期においては、ごっこ遊びを中心とする構成あそびが多くなり、鬼あそびも、一学期からのものが持続されているが、遊具の組み合わせ方が、より構造化されるのにもなつて、その内容は、より高次のものとなつている。

二 遊びの方法においても、遊びの種類の変化にともなうて、相当高次の段階まで発展している。これは、幼児の遊びに対する適応が、固定遊具に比して、相当大きいことによる。

三 遊びの類型を、パーテンの分類に従つて分けてみると、一学期には、身体的活動を中心とする平行あそびが多くみられるが、それがすぐ、鬼あそびを中心とする連合あそびへと変化し、終りごろでは、低次のごっこ遊びを中心とする構成あそびがみられるようになる。二・三学期は、構成あそびが中心となり、グループの構造化

やルールの条件の増加にともなうて、低次の協同遊びから、一部では、高次の協同遊びへと変化している。

このことは、固定遊具ではみられない現象である。

四 遊具の配置や他遊具との関連をみると、一学期のはじめは、一つずつのピースがそれぞれ独立して、固定遊具と同様の使用法がみられるが、しかし、すぐに各ピースを結びつけて、“線”としての組み合わせが始まる。そして、それに固定遊具を結びつけて、その線をさらに長くして、遊びの行動範囲を拡大していくようになる。これは、固定遊具の機能の延長のために、移動遊具が使用されたものと考えてもよいだろう。

二学期になると、他の移動できる遊具——マット・とび箱・旗・平均台・ままごと道具・柵・大積木など——とも関連させて、“平面”のなかで、いろいろな変化をもたらずような配置が選ばれる。また、このなかのあるピースは、固定遊具をも含めて、面を決定する線として使用されるようである。面のなかに包含されている遊具は、しだいに構造化されていく。

三学期になると、固定遊具との関連は非常にうすれ、他の移動できる遊具との関連が深くなり、その構造は面から“立体”へと変化する。すなわち、移動遊具のもっている三次元的性格を最大限に活用した遊びへと発展する。

これらのことは、固定遊具での遊びではみられなかったことで

あり、当然 社会的行動の発達には、固定遊具よりは、はるかに良好な結果を示しているといえよう。

〈6〉 おわりに

これまで、運動遊具については、主として社会性の発達という面からいろいろみてきたが、それぞれの遊具には、その遊具自体のもっている特性と限界——使用価値といってもよいだろう——があるということがわかる。だから、幼稚園の教師は、このことをよく理解した上で、遊びの指導や、環境の設定をすることが大切である。

そして、固定遊具や総合遊具と移動遊具とは、その使用価値が本質的に異なっていることがわかる。すなわち、前者は主として身体的方面の活動に、後者は主として社会性の発達に使用するとよいということになる。

けれども、子どもの社会性の発達の基礎には、毎日数百回にもわたる社会的交渉(註6)があり、このような社会的交渉が、どのような場で、毎日の遊びを通して社会性の発達に役立てられているかは、教育上大きな問題であろう。だからこそ、遊びの媒介としての遊具の特性や限界はどうしても理解されなければならないし、また、遊具についての研究は、なお一層なされなければならない。

ここにのべたことも、このような観点からもう一度考えてみていただきたいと思う。

最後に、納屋幼稚園における遊具の研究を、このような形式で発表することを心よくお許し下さった、中村園長はじめ、この研究に関係された諸先生がたに感謝の意を表したい。

(註)

- 1 Anderson, J. E. : The Theory of Early Childhood Education, The Forty-Sixth Yearbook of the National Society for the Study of Education, Part II, 1948, P. 85.
 - 2 Mc Laughline, K. L. : Kindergarten Education, Encyclopedia of Educational Research, 2nd ed., 1949, P. 652.
 - 3 Ibid
 - 4 納屋幼稚園
: 幼児の社会性をほすのに必要な施設・設備の研究(第1報告)第5報告、幼稚園研究集録、四日市市立教育研究所、調査研究報告、第50集、1959, PP. 1~39
 - 5 幼稚園施設研究 第3号、第8号、フレーベル館、1955~1959
 - 6 グロープ、ジャングルの施設価値について、幼稚園研究集録、四日市市立教育研究所、調査研究報告、第50集、1959, PP. 40~46
- Anderson, J. E. : 註1に同じ P. 84

(四日市市立教育研究所)